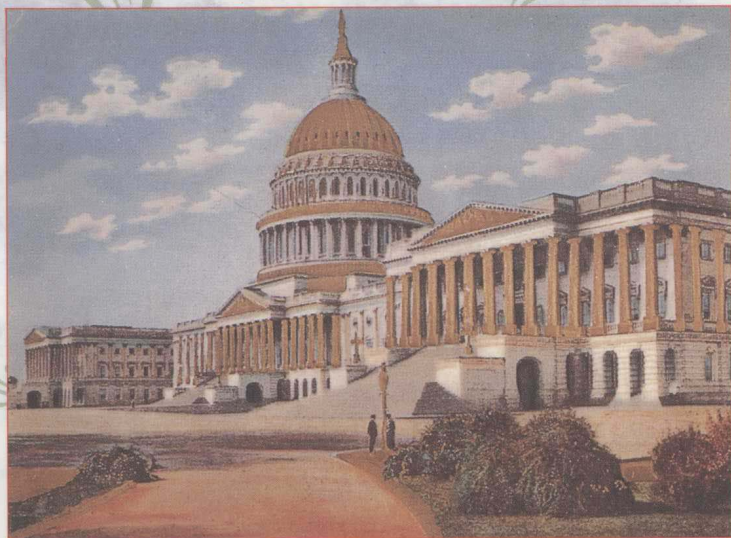


ワシントン発 地球村ねっとわーく

Keiko Kimura
木村恵子



日本評論社

ワシントン発
地球村ねっとわーく

*Keiko
Kimura*
木村恵子

日本評論社

木村 恵子 (きむら けいこ)

1945年東京に生まれる

恵泉女学園高校, 早稲田大学文学部 (心理学) 卒業

結婚後, タイ, ベトナム, スイス, アメリカに住む

現在, ヴァージニア州アーリントンに住み, NHK

〈ラジオ深夜便〉でワールドネットワークを担当,

毎土曜ワシントンよりレポートを送る

著書

ちいさな地球人たち—こどもの異文化コミュニケーション

(日本評論社, 1987) 地球村の四季—異文化

と出会って(日本評論社, 1989)

ブックレット

異文化でのコミュニケーションを考える(尾崎記念

財団, 1990)

訳書

ホスピス(家の光協会, 1981)

ワシントン発 地球村ねっとわーく

発行 1996年6月15日 第1刷発行

著者 木村 恵子

発行者 大石 進

発行所 (株)日本評論社

東京都豊島区南大塚3-12-4

電話 03-3987-8621(販売)

印刷:平文社 製本:牧製本

© 1996, by K. KIMURA, Printed in Japan

ISBN4-535-58207-6

はじめに

結婚以来、バンコク、サイゴン、ジュネーブ、東京に移り住み、その後、一年の予定で、身のまわり品だけをスーツケースに詰め込んで、家族そろって渡米したのが一九七八年のことでした。一年が二年になり、二年が三年になり、どうしたことが、すっかり根がはえてしまつて、今年で一八年が経とうとしています。

どうしてそんなにながく？としかれると困るのですが、アメリカの水が私たち家族の体質にぴったりとあっていたのでしょうか。それぞれ水を得た魚のように楽しく泳ぎまわっています。

三人の子供たちは、ABCも知らずに来たのに初等教育から高等教育までアメリカで終了し、

英語と日本語のバイリンガルに育っています。おまけに、日本語が全然できないアメリカ人の義理の息子まで家族に加わってしまったのです。

一方、親の私とは言えば、同じ期間アメリカに住んでいるというのに、英語は相変わらずの「外国語」で、四苦八苦している毎日です。

自分では、今でも百パーセント日本人だと信じているのですが、絨毯の上を土足であるいても平気でいられたり、コーヒーマグで日本茶を飲んだり、お正月にクリスマスツリーがあっても違和感を感じなくなっている自分を発見して、「やっぱり……ちよつと違つてきてるかな？」と密かに「百パーセント」を「九十九パーセント」くらいに改めなければいけないかしらと思いはじめているところではあります。

「あら、あなたはまだアメリカ人じゃないの？」と驚くアメリカ人の友人もいますが、どんなにアメリカが好きでも、国籍を変えようという気持ちになつたことは一度もありません。人生の大半をアメリカで過ごし、アメリカ人と同じような言動をしている三人の子供たちも、まだ国籍は日本のままです。

「もし、これからずっと日本の外に住むつもりで、なにか不便が生じてきたら、いつでも国籍は変えていいのよ。あなたたちは地球人なのだから」と子供たちには言っているのですが、

今のところへ地球村〜というパスポートがないので、法律上は「日本人でいい」のだそうです。

私が初めて海外に出た一九六三年には、まだ自由に渡航することも許されず、ほんのひとりの人しか日本以外の世界を見ることができない時代でした。ところが今では、まるで隣の町に行くような気楽な気分で、普段着の海外旅行が楽しめる時代になったことはうれしいことです。情報はインターネットが世界中を駆けめぐり、即時にニュースを伝えてくれます。情報の世界には国籍なんて存在しません。大気がこの地球をおおっているように、目に見えない無数の電波が網の目のようにこの地球を覆っているのです。

私が毎週土曜日に送っているNHKラジオ深夜便の「ワールドネットワーク」のレポートも、アーリントンの自宅の電話から、東京のスタジオを通して、日本の隅々まで同時に送られています。日本の新聞や雑誌では知り得ない、ファーストハンドの情報をお届けしたいと思ってアンテナをはっている毎日なのです。

この本は、「ちいさな地球人たち―こどもの異文化コミュニケーション」、『地球村の四季』

異文化と出会って」(いずれも日本評論社刊)に続く、私自身の異文化体験をまとめたものです。

さまざまな異なった文化を背負ったひとたちと出会い、新しい発見をしている毎日ですが、本書を書きおろすにあたって、数々のインスピレーションを与えて下さったたくさんのへ地球村への友人たちに、心からのお礼を申しあげたいと思います。そしてこれからも日系地球人として、へ地球村への片隅でこの仲間たちと手を取りあい、人間のおろかな争いによってこの地球を滅ぼすことがないように、しっかりと現実を見つめ、行動していきたいと願っています。

本書の出版にあたっては、日本評論社の大石進さんにたいへんお世話になりました。あらためて感謝申し上げる次第です。

一九九六年五月

アーリントンの自宅にて

木村恵子

目次

はじめに

親をえらぶ 1

わたしは誰の子供？ 6

あなたはおかあさん？ それともおばあさん？ 11

ガンコントロール 17

永久保証 22

パスポートはへ笑顔へ 30

他者のために 34

他者のために その二 40

巢立ち 45

政治教育の実践 51

アメリカの大学も狭き門 57

卒業式	65
カップル	69
お葬式	74
お葬式 その二	79
娘の婚約	83
花嫁の母	89
ふたつのふるさと	98
同姓同名	104
メキシコで出会った長崎の二十六聖人	109
カタカナと外来語	116
履歴書	123
私はわたし	127
豊かな人々	131
豊かな人々 その二	137
平面から立体へ	141

バイリンガル・バイカルチュラル 144

フレキシビリティ 150

靴の河原 155

「ちよつと、おかあさん」 160

へその緒 165

ところかわれば 169

初出誌紙一覧

政治教育の実践

メキシコで出会った長崎の二十六聖人

世界と議会 一九九三年一〇月号所収

朝日新聞 一九九三年一月一九日

親を選ぶ

この世に生まれる前の赤ちゃんの国の話があったのは、たしか「青い鳥」でしたね。チルチルとミチルが訪れた「へみらいの国」では、まだ生まれる前の赤ちゃんを「時のおじいさん」がそれぞれのお母さんに送りこんでいたというお話です。

もし、この世に送りこまれる赤ちゃんに、（神様ではなくて、赤ちゃん本人に）選択権があたえられて自分の親をえらべたとしたら……！世界の人口分布図はかなり違ったものになっているのではないでしょうか。

肌の色が違うというだけで存在までも否定されたり、生まれた国が戦争をしているため国を追われ、木の葉のように大海をさまよい、あるいは砂漠を放浪し、食べ物も口に入らないよう

な生活を、みずから望んで生まれてくる赤ちゃんがいるでしょうか。

裸でこの世に生をうけた赤ちゃんには何の責任も無いはずなのに、私たちは生まれ落ちたその瞬間から、目に見えない烙印を押されてしまっているのです。

私は日本人の両親から生まれ、このことが果たして幸せだったかどうかの議論の余地もなく、生まれながらの日本人としてこの世に存在しているのです。

アメリカ合衆国という国はその字の示す通り、さまざまな背景を背負った人が、ヘアメリカ人として国の中枢で働いています。もとドイツ人だった政府の高官、もとケニア人だった公認会計士、もとアルゼンチン人だった裁判官、もとベトナム人だった医者、もとロシア人だった大学教授……。私の周りを見渡しただけでもこのように国籍を変えてアメリカ人になったひとがたくさんいます。日本人として生まれた私でも、希望すればアメリカ人になることは可能です。人は望めば国籍を選びとることができるのです。でも、親を選ぶことはできません。

最近では医科学技術が発達して、男女の生み分けが可能になったり、不妊の女性にかわって代理母が子供を生んだり、冷凍してあった精子で死んだ人の子供を宿したり、未婚の女性がメーロオーダーで届いた精子で子供を作ったり……。つい昨日まで空想小説の中だけだった世界が、今日は現実になっているのです。親が子を選べる時代になってきたのです。でも、子が親を選

ぶことはできません。

ある人が大学者に「長寿の秘訣」を聞いたところ、「両親を選びなさい」と言われたという話を聞いたことがあります。

へもし、本当に親を選ぶことができたなら……だれもが一度は考えることかもしれません。

それを実際にやってのけた、一二歳の少年がいます。

グレゴリーキングズレー君（12）は、自分を虐待したり、里子に出して、母親らしいことはなにもしてくれなかった自分のお母さんに対し、親子の縁を切りたいと裁判にうったえたのでした。

日本では、親が子を勘当するという話は聞きますが、小学生の子供が親に離縁状をつきつけたという話はききません。アメリカでも初めてのケースときました。

テレビに写し出されたそのグレゴリー君のお母さんは、厚化粧をして、髪にはおおきなりボンを結び、派手なワンピースを着て法廷の被告席に座っていました。一目で、ふつうのお母さんでないことは、明らかでした。

人々の注意をひくためか、すすり泣きをしながら、

「一生懸命働けば、いつか子供をかせしてもらえんと思っていました……」

と、時々アイシャドーやマスカラに気をつけながら、目元をおさえ、涙をぬぐっていました。その一場面だけを見たら、ひよつとして、もらい泣きしてしまう人があるかもしれないと思うほど、その演技は堂に入ったものでした。

けれども、その後で、彼女の証言を否定するひとたちが次々に現れて、マリファナを吸い、お酒を飲み酔っぱらい、売春まで働き、子供を蹴ったり殴ったりの虐待を重ねる実像が浮かびあがってくると、少年の訴えが人々の同情を得るのに時間はかかりませんでした。結局、フロリダ州地裁少年部の判事は、少年の訴えを全面的に認め、実母との絶縁を認めるという画期的な判決を下したのです。

グレゴリー君は、晴れて、今一緒に生活しているラス弁護士一家の養子になり、大嫌いだつた自分の名前もショーンに変え、ショーンラスとして新しい人生を歩むことになったのです。

新しく両親になったラス夫妻とはほづりをする新生ショーン君のこぼれるような笑顔をみながら、私はこの少年のしあわせを願わずにはいられませんでした。

この裁判は、未成年者でも親権の破棄を訴え、子供に「親を選ぶ権利」があるということを認めた、アメリカ人にとっても衝撃的な判決でした。

さて、もしあなたにも権利があるとすれば、親を換えたいですか？ 私は、まだこの質問を自分の子供たちにはできないですが……。

私は誰の子供？

けれどもいつもショーンのようにいくとは限りません。ジェシカの場合はこうです。

ジェシカの母カーラはアイオワに住む二八歳の未婚女性でした。ジェシカはボーイフレンドのダンとの間にできた子供なのですが、出産当時はすでに彼との関係は終わっていたので、出生届の父親の名前の欄には、いま付き合っているボーイフレンドにサインをしてもらいました。そしてジェシカが生まれて二日後には、自分は育てる意志がないことを申したて、養子にだすことを申請したのです。

友人を通してこの話を聞いたジャンとロビーは遠く離れたミシガンに住んでいましたが、すぐに養子の手続きをとり、喜び勇んでアイオワまで雪をついてジェシカを引き取りにいきました。